

氏名(本籍)	さ さ き し ろ う 佐々木 史 郎 (東京都)
学位の種類	理 学 博 士
学位記番号	博 乙 第 654 号
学位授与年月日	平成 3 年 2 月 28 日
学位授与の要件	学位規則第 5 条第 2 項該当
審査研究科	地球科学研究科
学位論文題目	A Geographical Study on the North-South Variation of Korean House Form (朝鮮半島における民家形態の南北的差異に関する地理学的研究)
主査	筑波大学教授 理学博士 山 本 正 三
副査	筑波大学教授 理学博士 奥 野 隆 史
副査	筑波大学教授 理学博士 佐々木 博
副査	筑波大学教授 理学博士 高 橋 伸 夫

論 文 の 要 旨

本研究は、従来、気候条件、とくに寒暖の差との関係で説明されることの多かった朝鮮半島の民家形態の南北的差異について考察したものである。

従来の通説では、同半島の北部においては、冬季の酷寒に対処するため、保温にすぐれた内厩式の畜舎配置や復列型の間取りなど、凝集的・閉鎖的な民家形態が発達するとされてきた。一方、南部では、寒気に対する備えはさほどではなく、夏季の生活に適した分散的・開放的な形態をとり、通風性に富む板間を重視しているとの説明が一般的である。とくに、南部地方の民家形態については、南方文化的・温暖地的特徴が自明の前提として強調されるくらいがあった。

著者は各地の民家形態を、防寒・防暑的機能に留意しながら検討し、朝鮮半島における民家形態の南北的差異について、以下のように系統的に整理できることを明らかにした。

- (1) まず、板間の利用やオンドル房の通風に関しては、南部よりも中部が先行した。寒気の差を反映して南北方向の推移を示すものには、オンドルの暖房性能があるが、防暑的機能が最も発達しているのは、中部地方の民家である。朝鮮半島における板間の様式は、温暖な南部から次第に中部以北へ及んだというよりは、中部から周辺へ拡散した可能性が強い。これは首都の都市住宅の様式にならない、夏季にも屋内の生活の快適さを求めたものと考えられる。南部では、冬季の生活に備えることが優先され、夏季の生活空間を戸外に求める農村的な生活様式が普通であった。また、済州島の板間は、本土の大庁とは系統を異にする。
- (2) 済州島民家の広間は、基本的に北部のものと共通する。しかし、導入されたオンドルの様式の違

いや導入時期の違いが、その後の間取りの発達過程を分けた。間取りの発達の過程で、済州島民家の間取りの中に、本土南部のものと同様の形態が現われたが、部屋の接続の順序からみて、両者は本来別々の母型から発達したものと考えられる。

(3) 朝鮮半島の民家の畜舎配置に重要な意味をもっているのは、飼料調理用のかまどの配置である。復列型民家では、かまどと畜舎の連絡さえ確保されれば、畜舎内の保温というより、屋内作業場の確保に意が用いられる。

(4) 本来、済州島を含む朝鮮半島全域を通じて、冬季への備えを優先させた住居様式がみられたが、中部地方の様式の拡散と、より単純な構造の単列型民家の拡散により、分布域が隔てられ、その後、それぞれの地域で独自の変化をとげて、今日のような地方的差異を示すようになったものと思われる。全体として、朝鮮半島の民家形態の南北的差異は、南方からの伝播要素の導入を想定しなくても、北方からの伝播要素であるオンドルの導入時期と暖房性能の違い、それにソウルを中心とした中央の文化の拡散によって説明が可能である。

審 査 の 要 旨

朝鮮半島の民家形態の地域的差異については、気候環境への対応や、寒冷な北方地域に由来する要素と温暖な南方地域に由来する要素の伝播・融合という視点から説明されることが多かった。しかし、それらの説明は、対気候的措置としての実態や導入の経路についての検討を欠いた推定にとどまるきらいがあった。

佐々木氏の研究は、防寒・防暑的な機能の実態を検討して、それが必ずしも南北方向に沿った差異を示しておらず、互いに隔たった北部と南部との間にいくつかの共通の特徴が見られることを明らかにしたものである。また、とくに、これまで南方文化に由来する要素とされてきた板間の様式について、現存の古家屋の板間の構造やその導入過程を検討して、これが南方からの拡散を仮定しなくても説明が可能であることを指摘した。これは形態上の類似を機能や文化系統上の類似と短絡させがちだった従来の説明に対して、新たな仮説を提示したものとして、本論文には高い評価を与えることができる。

よって、著者は理学博士の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。